

令和 4 年 6 月 7 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00331

研究課題名（和文）『太平記』の諸本展開と南北朝・室町の文芸・政治・社会

研究課題名（英文）Relationship between various books of Taiheiki and literature, politics, and society during Nanboku-cho and Muromachi era

研究代表者

小秋元 段 (KOAKIMOTO, Dan)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：30281554

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1370年代の政治状況を検討し、『太平記』諸本の本文の必然性と意義を考察した。また、『太平記』諸本における日本古典作品の受容、漢籍的記事の受容の差異を析出し、その背後にある室町期の武家や禅林の文学環境との関わりを究明した。さらに、『太平記』が室町時代に愛読された理由をめぐり、この時代特有の政治・社会状況下での人々の知性や自己認識の側から考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文学作品のテキストは一つに固定されたものではない。特に、写本の時代には、内容の異なる複数のテキストが存在した。本研究では、南北朝時代の複雑な政治状況のなかで生まれた『太平記』が、成立当初より歴史的背景のなかで複数のテキストを生みだし、さらに室町期の社会・文化状況のなかでそれを加速させることを明らかにした。そのことを通じて、殊に世界に比して相対的に古写本に恵まれた日本古典文学への研究の一視角を提示した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we considered the relationship between the political situation in the 1370s and various books of Taiheiki. We also investigated the relationship between the acceptance of Japanese classical literature and Chinese literature in various books of Taiheiki and the literary environment of samurai and Zen Buddhist temples. In addition, we considered the reason why Taiheiki was read in the Muromachi era from the aspect of the intellect and self-recognition of the people of this era.

研究分野：中世文学

キーワード：太平記

1. 研究開始当初の背景

軍記物語の特徴の一つは、どの作品においても大幅な本文異同をもつ諸本群を抱えるところにある。それゆえ、軍記物語における諸本研究は、最も重要な基礎研究として注力されてきた。なかでも、『太平記』の諸本研究では、伝本の収集・整理、系統化、先後関係の究明といった作業が長らく継続されてきた。その結果、約百本が残されている写本と、複数系統に種別できる古活字本・整版本の本文系統や性格がほぼ明らかになった(小秋元段『太平記と古活字版の時代』新典社、2006年、長坂成行『伝存太平記写本総覧』和泉書院、2008年、ほか)。

こうした研究活動は、『太平記』諸本の文献学的な位置づけを明らかにしただけではなく、作品論的な理解を深めることにも貢献してきた。だが、これまでの研究は、『太平記』諸本における本文の流動を促す原動力までを十分に明らかにするものではなかった。

2. 研究の目的

『太平記』の諸本展開と南北朝・室町の文芸・政治・社会」と題する本研究は、従来の諸本研究の成果をさらに発展させ、『太平記』の本文流動の動態をとらえ、それを促す背景を究明することを目的とする。すなわち、個々の伝本の本文のもつ独自性に着目し、それを生みだすメカニズムを、一つは、作品成立期である南北朝期の政治状況との関わりから、もう一つは、流布期にあたる室町期の享受・書写圏の文学・文化・社会的環境との関わりから明らかにすることを目的とする。その意味で本研究は、『太平記』固有の諸本研究の枠を超え、文学が成立と享受の過程において、同時代の政治・文化・社会といかに関わるのかという問題を明らかにしようとする試みである。

3. 研究の方法

本研究では『太平記』の本文流動の原動力を主に、『太平記』の成立時期である南北朝期の政治状況の側面と、『太平記』が広く享受されてゆく室町期の文学・文化・社会状況の側面の二つに視点をあてて考察を行ってゆく。具体的には、南北朝期の政治状況と『太平記』の本文流動に関しては、応安・永和期の政治状況に焦点を当て、政権基盤の脆弱な細川頼之の政治体制と『太平記』との関わりを考察し、古態の段階の諸本の派生について究明してゆく。つぎに、室町期の文学・文化・社会的環境と『太平記』の本文流動に関しては、室町期の武家における文芸享受と『太平記』、禅林文化と『太平記』の漢籍の記事、室町期の社会環境と『太平記』の本文流動といったテーマに即して考察を進める。

4. 研究成果

以下、本研究における主要な成果について説明する。

『太平記』成立期における武家権力者と『太平記』本文の流動については、和田琢磨が複数の成果をあげている。まず、和田は国際日本文化研究センター機関拠点型基幹研究プロジェクト「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」古代・中世班共同研究「投企する古典性 視覚／大衆／現代」H30年度第4回研究会「投企する太平記 歴史・物語・思想」において、「『太平記』と武家 南北朝・室町時代を中心に」と題する発表を行い、そこで『太平記』諸本と武家政権との関わりをめぐる従来の研究の総括と課題展望を行った。また、「『太平記』と武家 天正本と佐々木京極氏の関係を中心に」(軍記物語講座第3巻『平和の世は来るか 太平記』花鳥社、2019年)では、従来、佐々木京極氏の影響が強く及んだと見なされてきた天正本本文を再検討し、同本では佐々木道誉を称讃する記事がある一方で、批判する記事もあることを指摘する。そして、天正本では他氏族に関する独自記事でも同様の傾向が認められることから、天正本の独自記事は武家の圧力によって生まれたものではなく、編者のもとに各氏族の資料が多数集積された結果だとの見方を示した。

『太平記』と和歌をめぐる研究は、北村昌幸が表現論的方面からの論考を発表した。北村「いくさの舞台と叙景歌表現」(『中世文学』第63号、2018年)は、『太平記』の合戦叙述が『平家物語』に比して和歌的表現を積極的に採り入れていることを指摘し、この現象に作者が自ら体験した戦場の鮮烈なイメージを叙景化する方法を見出すとともに、合戦を「見せ物化」する『太平記』独特の叙述方法であるとする。そして、その方法を成り立たせる際に用いられたのが、『歌枕名寄』や『夫木抄』などの名所歌集・類題集であったことを指摘する。また、北村「『太平記』の表現方法としての和漢混淆文」(前掲『平和の世は来るか 太平記』)は、『太平記』に漢文訓読調の文体と和文調の文体が使い分けられていることを指摘し、前者が事のあらまし、後者が事のありさまを叙述する際に用いられる傾向にあると論じる。そして、『太平記』では表現における《和》と《漢》が意識的かつ自在に使い分けられている点に叙述上の特色があるとする。表現研究は『太平記』研究のなかでも比較的手薄な分野で、今後はこうした視点から論究を深めることが可能であるとともに、『太平記』成立の文学的環境を考察する際にも活用が可能であろう。

『太平記』と漢籍的世界をめぐる研究は小秋元段、森田貴之が進めた。小秋元は「『太平記』

における禅的要素、序説」(前掲『平和の世は来るか 太平記』)において、近年、『太平記』の成立に禅林の関与が指摘される問題を再検証し、『太平記』が五山に対して必ずしも好意的ではなかったことを確認し、両者の関係性を慎重に捉えるべきことを論じた。森田「『太平記』の禅学、宋学」(前掲『平和の世は来るか 太平記』)は、『太平記』の周辺に「宋代禅」や「宋学」の存在があったことを認めつつも、『太平記』の表現はそれらに由来する知識を表層的に用いているに過ぎず、どこまで自覚的に物語に深化させていたかは疑問であるという評価を行っている。『太平記』と禅との距離は、今後も森田の示した研究手法を活用して測ってゆく必要がある。

個別の伝本に関する研究としては、和田琢磨「西源院本『太平記』の基礎的研究 巻一・巻二十一の書き入れを中心に」(『国文学研究』第190号、2020年)があげられる。本論致では、西源院本の書誌調査にもとづき、原本に補入、見せ消し、重ね書き、擦り消し、異本注記が様々になされており、それが東京大学史料編纂所蔵の影写本に適切に継承されていないことを指摘する。さらに、西源院本の書き入れが南都本系本文によっていること、西源院本系の伝本として織田本を重視すべきことなどを説く。閲覧の機会が限られ、従来、研究の乏しかった西源院本の基礎研究として、数々の重要な提言を行っている。

また、今期は大坪亮介がこれまでの研究を『南北朝軍記物語論』(和泉書院、2020年)にまとめた。第一部は構想論を中心とするが、第二部では個別の記事の解釈・考証を深めており、そのなかでも第五章「天正本『太平記』における真言関係記事の増補」、第六章「天正本『太平記』巻四「呉越戦事」の増補」は、天正本と真言宗寺院、禅林との関わりの可能性を追究する論である。天正本に限らず、『太平記』の諸本の独自記事には、このような姿勢でその由来・背景を明らかにしてゆく余地が大きく残されているものと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 和田琢磨	4. 巻 190
2. 論文標題 西源院本『太平記』の基礎的研究：巻一・巻二十一の書き入れを中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国文学研究	6. 最初と最後の頁 5-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大坪亮介	4. 巻 50
2. 論文標題 『高野物語』の歴史認識と作者説：北条泰時と醍醐天皇を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪大谷国文	6. 最初と最後の頁 70-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小秋元段	4. 巻 8
2. 論文標題 「雲景未来記」の批評精神と『太平記』の現実感覚	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アナホリッシュ國文學	6. 最初と最後の頁 59-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田琢磨	4. 巻 120
2. 論文標題 西源院本『太平記』の基礎的研究：巻一・巻二十一の書き入れを中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国文学研究	6. 最初と最後の頁 55-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北村昌幸	4. 巻 63
2. 論文標題 いくさの舞台と叙景歌表現	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中世文学	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田貴之	4. 巻 223
2. 論文標題 はじめに (日本人と中国故事 : 変奏する知の世界)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 和田琢磨
2. 発表標題 『太平記』と武家 南北朝・室町時代を中心に
3. 学会等名 国際日本文化研究センター 大衆文化プロジェクト古代・中世班共同研究「投企する古典性 視覚 / 大衆 / 現代」 H30年度第4回共同研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 和田琢磨	4. 発行年 2020年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 871
3. 書名 古典の未来学 : Projecting Classicism	

1. 著者名 松尾韋江編、和田琢磨、小秋元段、北村昌幸ほか著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 花鳥社	5. 総ページ数 278
3. 書名 軍記物語講座 第3巻 平和の世は来るか	

1. 著者名 大坪亮介	4. 発行年 2020年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 399
3. 書名 南北朝軍記物語論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	北村 昌幸 (KITAMURA Masayuki) (20411770)	関西学院大学・文学部・教授 (34504)	
研究分担者	和田 琢磨 (WADA Takuma) (40366993)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	森田 貴之 (MORITA Takayuki) (90611591)	南山大学・人文学部・准教授 (33917)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	大坪 亮介 (OTSUBO Ryosuke) (10713117)	大阪大谷大学・文学部・講師 (34414)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関